史記の小説的な側面について

前野直彬

斎藤謙の拙堂文話巻五に、次のような一節がある。

史記の叙事議論は淋漓として致を尽す。故に重沓する者有り。漢書或は之を刪り、以て斉整を取らんとす。此れ以て班馬の優劣を見る可き也。史記張耳伝に、極めて趙王が謹敬の状を写して曰く、朝夕袒して韝蔽し、自ら食を上つる。礼甚だ卑くして子婿の礼有りと。以て高祖の倨傲に反襯す。而るに漢書は袒韝蔽の三字を削れり。又泄公が貫高と相問労するの状を写して曰く、篋輿して前む。仰ぎ視て曰く、泄公邪と。泄公邪の三字、極めて情致有り。而るに漢書之を刪去す。……此の如きの類、皆其の旧に如かざる也。

拙堂の評価によれば、漢書は遠く史記に及ばぬと言う。その立場を支えるものとして、右のような議論が提示されているのである。しかし私はこの小論で、昔からの「班馬の優劣」論に口を挟むつもりはない。ただ拙堂が提示したような班馬の差違について考え得る若干のことを、述べてみたいと思うのである。

そこで、拙堂の示した第二の例について見よう。趙王張敖はよく漢の高祖に仕えたが、高祖は傲慢な態度で趙王に対した。趙相の貫高たちは怒って王に謀叛をすすめたが、王は承知しない。遂に貫高たちは独断で高祖暗殺の計劃を立て、事が成れば王に帰し、敗れれば我々が罪を引受けようと誓った。ところが計劃は露見し、趙王を主謀者とにらんだ高祖は、王を逮捕する。事を企てた一味は争って自殺したが、貫高は王の無実を証明しようと、王に従って都へ出た。そこできびしい拷問を受けるが、貫高は頑として王の無罪を主張し続ける。そこで高祖は朝臣の中から高の旧友である泄公を選び、使者として高の訊問に当らせた。情にほだされて高が実を吐くように仕向けたのである。泄公は節を持して獄に赴いた。拷問に疲れ果てた貫高は、竹の輿に乗せられ、泄公の前に出る。そして泄公の顔を仰ぎ見て、「泄公邪」と言った。

上使泄公持節問之、篋輿前、仰視曰、泄公邪、泄公労苦如生平驩、与語、問張王果有計謀不……

その「泄公邪」の三字が（厳密に言えば曰泄公邪の四字が）、漢書では削られているのである。ただそれだけの相違にすぎない。しかしその相違のために、この歴史の一齣における劇的な情景の盛上りが、漢書では著るしく弱められたと見えるのである。

天子の使者が直接に訊問すると言う。貫高にとっては最後の申開きの機会である。肉体は衰弱していても、彼は気負い立ってこの場に臨んだであろう。しかし彼が威儀を正した勅使の顔を仰ぎ見たとき、そこにはかつての親友の、温かい表情があった。こうして二人の友人は、一人は「威、海内に加」わった天子の使者として、一人は確実に死刑を宣告さるべき囚人として、向い合ったのである。驚きと懐しさとの交錯した複雑な感情が、「泄公邪」の一語となって貫高の唇から洩れた。

これは漢初の歴史における、劇的な挿話の一つである。だがそれにしても、挿話は所詮挿話に過ぎない。貫高の個人的な感慨はどうあろうとも、漢初の歴史は確実にその歩みを進めて行く。高祖の強い意志によって、建国の功臣たちは一旦は王や諸侯に封ぜられながら、また次々と取り潰されて行った。それによって劉氏の帝位は全く安定したように見えながら、すぐ次には呂太后の出現によって、深刻な危機が訪れる。武力で劉氏と対抗しようとする者ばかりが危険な敵手ではなかったのである。

貫高の謀叛も、そのような推移の中における一つの事件であった。趙王張敖の父張耳は、後には高祖の麾下に入ったけれども、初めは彼と同じく秦に叛旗を飜えした英雄の一人である。その子孫が連綿として王家を維持するうちには、何時かは漢に対する敵国となる危険性があろう。だから張敖自身に罪があろうとなかろうと、高祖はこの機会を利用して、張氏の御家断絶を計ったのである。そして結局、泄公の情にからめた訊問に対しても王の無実を主張し続けた貫高の証言と、張敖の妻が呂后の生んだ公主だったために、張氏の家は絶えずにすんだが、趙王の位は奪われて宣平侯に落されてしまった。高祖の意図は半ば成功したわけである。

しかし司馬遷の関心は、その高祖の意図に抵抗して、遂に張氏を守り了せた貫高の侠気を記すことにあったと見える。張敖の生命を救った原因を公平に評価するとき、貫高の証言と我が娘可愛さのあまり高祖に敖の無実を訴えた呂后の取りなしと、どちらが大きかったかは、簡単には断定し得ないであろう。しかし史記を読んだ限りでは、呂后の嘆願はわずか一行あまりの記述に止まり、それも高祖から一言のもとに拒否されている。張敖を救ったものは全く貫高の証言だったと印象せしめるように記されているのである。

貫高はこのとき年六十余、以前は張耳の客であり、「生平気を為す」と、この事件の冒頭に司馬遷は記している。彼が特に一つの列伝として立てた「游侠」たちと同じ性格の人物が、ここにも登場したのである。そしてその男の情熱と意志が、専制君主、歴史を創り出す絶対者のそれに対して、歴史のほんの小さな部分において抵抗を試みる。それはむろん、絶対者の意志と情熱が描く歴史の軌跡を変えることはできない。しかしその軌跡はこの男の前でしばらく静止し、そして僅かに迂回している。絶対者の力によっても踏みにじっては通れぬ人間の力のあることを、この男が示したのである。それは絶対者が創る歴史の中では微少な存在ではあるが、同時に巨大な意志と情熱の所産でもあった。司馬遷はこの場合、その巨大さを記録することに情熱を傾けたに違いない。

司馬遷はこの事件の冒頭に、貫高の性格を「生平気を為す」と記した。やがて趙王が捕われて都へ護送されたとき、高祖は「趙の群臣賓客の敢て王に従ふ者有らば皆な族せん」との詔を下したが、貫高たち十余人は「自ら髡鉗して王家の奴と為り」、王に従って都へ出た。その後趙王が釈放されると、高祖は貫高をも赦免し、泄公にその旨を伝えさせたが、そのとき喜んだ高は、「吾が王も審に出だされし乎」と尋ねた。そして王の釈放を確認すると彼は、人臣たる者が一度纂弑の名を得ながら再び天子に仕えることはできない、「縱し上の我を殺さずとも、我は心に恥ぢざらん乎」と言って自殺してしまう。「此の時に当り、(貫高の)名は天下に聞ゆ」と言うのが、この事件の最後に置かれた言葉である。

これらの叙述にさきの「泄公邪」の一語をあわせて見るならば、この事件の立役者である貫高の意志と情熱とがどのように高祖のそれに抵抗したかが、事件の最中における彼の感情の揺曳をも含めて、適確に理解し得るであろう。そして「名は天下に聞ゆ」と言う結びの文句の中には、司馬遷が貫高に与えた称讃を読みとることができる。

ところが「泄公邪」の一語のみならず、上に引用した部分はすべて、漢書では削られてしまった。むろんそれでもこの事件の梗概、およびその中での貫高の役割の説明には、何の差障りもない。だがその代り漢書に記されたのは、あくまでもこの事件の梗概に止まった。名将功臣の家が続々と取り潰しに遭う漢初の歴史の中でのこの小波瀾は、漢書によっても読むことはできるが、その波瀾をおこした貫高と言う男の姿は、著るしく色あせたものとなってしまったのである。

恐らく班固も、貫高の一片の義心は認めていたであろう。だから漢書にも、彼が張敖の生命を救ったことだけは記録されたのである。しかし班固にとってはまた、貫高の抵抗などは歴史の大きな流れに浮いた一つの波紋としか計量されなかったのであろう。叙述の「斉整」をはかる彼の立場からすれば、貫高の言動の一々などは歴史として記録されるに値しない、微細な史実と見えたに違いない。

大体、漢書と史記の互いに重複する時代、即ち高祖から武帝までの部分を比較してみると、記載された事実の数は漢書の方が多い。従って総体には漢書の方が史記より長くなっているので、晉の張輔は班の馬に及ばぬ点を挙げた中に、

遷の著述は、辞は約にして事は挙くしたり。三千年の事を叙するに唯だ五十万言なり。班固は三百年の事を叙するに、乃ち八千万言、煩省同じからず。遷に如かざるの一也（晉書張輔伝）

と言う。しかし上の例を見れば、必ずしも史記が「辞約而事挙」だとは言えないのであって、張輔のこの意見に対する清人の次のような反駁の方が、当を得たものと思われる。

馬の意は文を行るを主とし、事を載するを主とせず、故に簡なり。班は事を紀すを主としたれば、詳瞻なり（王鳴盛十七史商榷七、史漢煩省）

蓋し遷は叙事を喜み、経術の文、幹済の策に至っては、多く収入せず。故に其の文は簡なり。固は則ち文字の学問に関はり有り、政務に繋はり有る者は、必ず一一之を載す。此れ其の巻帙の多き所以也。今漢書の各伝を以て史記と比対すれば、史記に無き所にして漢書の増載せし者有ること多し。皆経世有用の文に係る。則ち繁冗を以て之を議するを得ざる也（趙翼廿二史箚記二、漢書多載有用之文）

つまり司馬遷が個々の事件の描写に意を用いたのに対し、班固の立場は、後世に残すべき重大な史実を洩れなく記録しようとするにあったと言うのである。旧唐書を書き直した新唐書が「其の事は前より増し、其の文は旧より省けり」（進新唐書表）と自任したのと同様の関係が、史記と漢書との間にも成立していると言えよう。

ここでもう一つの例を挙げよう。史記韓長孺列伝には、漢の景帝の代に梁国の政治家・将軍として名声があり、武帝の初年には匈奴征討の大将軍ともなった韓安国が、梁に仕えていたころ、一時罪を獲て獄に下された話を載せている。そのとき獄吏の田甲と言う者が安国を侮辱したから、安国が口惜しさのあまり「死灰もまた燃え出すことがあろうぞ」と言うと、田甲は「燃えたら小便をひっかけてやる」と応酬した。ところが安国は、やがてまた梁に登庸される。田甲は報復を恐れて逃亡したが、安国に一族皆殺しにすると脅かされ、肉袒して自首した。すると安国は笑いながら、「おい、小便をかけてもいいぞ。君など処罰したところで始まらないのだ」と言って、かえって田甲を好遇した。

其後安国坐法抵罪、蒙獄吏田甲辱安国、安国曰、死灰独不然乎、田甲曰、然即溺之、居無何、梁内史欠、漢使使者拝安国為梁内史、起徒中、為二千石、田甲亡走、安国曰、甲不就官、我滅而宗、甲因肉袒謝、安国笑曰、可溺矣、公等足与治乎、卒善遇之、

この一節を漢書韓安国伝は、ほぼ忠実に史記の文章に従いながら、た

だ「可溺矣」の三字を刪っている。たしかにこれは品のよくない言葉だし、歴史的に重大な発言でもないが、それを省いてしまっては、初めから田甲を赦してやるつもりの安国が、それと知らずに恐怖におののいている相手を見下しながら言った言葉の妙味は失われてしまう。

この一条の事件は、史記ではすぐ次に続く李将軍列伝に、李広が一時将軍の地位を失って庶人とされていたとき、霸陵の尉に侮辱されたことがあり、後に再び将軍となった広はすぐに霸陵の尉を陣中に呼び寄せ、斬ってしまったと言う話と対応する。ひとしく匈奴征討の中心となったこの二人の将軍の性格の相違を、この二つの対蹠的な事件によって描き出すことは、恐らく司馬遷の計算に入っていたであろう。その対照は漢書においても継承されてはいるものの、「可溺矣」三字の脱落は、とみに効果を弱めたと言わざるを得ない。

その一方、この事件の少し後に起る馬邑の戦のくだりになると、漢書の筆は急に精彩を増す。この戦闘を始める前の御前会議における主戦論者王恢と非戦論者韓安国との論争を、漢書は極めて精密に、二人の相譲らぬ語気を感ぜしめるまでに描写しているのである。ところが史記はその部分になるとかえって淡白に、二人の論旨を要領よくまとめて記録しているにすぎない。

馬邑の戦は当時では政治・軍事・外交上の重大事件であり、それについての論争は後世の為政者にとっても参考となるべきものであろう。即ちこれは趙翼の言う「経世有用の文」に属する。そしてここの韓安国は、歴史の本舞台に脚光を浴びる千両役者の姿となっていた。従って彼の発言の重さは、獄吏との死灰問答などとは比較にならない。漢書が馬邑の戦において詳しく、その前の事件では筆を省いた態度は、歴史上の比重から見て叙述の均衡を得たものと言うべきであろう。だがその一方では、御前会議の大論争には筆を惜しんでも、「可溺矣」の一語は記しとどめようとした史記の文章の中に、韓安国と言う歴史の本舞台を踏んだ男の「人間」の姿を、我々は興味深く眺めることができるのである。

このような、歴史上の人物のある瞬間におけるある言動を特に詳しく、精彩をこめて記すことは、史記以前の歴史においても見得るところであった。たとえば左伝の文公十八年、無道な斉の懿公のために父を刖られた郤歜と妻を奪われた閻職とが申池に浴したとき、歜が職を叩いたので職が怒ると、

歜曰く、人女の妻を奪へども怒らず、一たび女を挟つも庸何ぞ傷まんと。職曰く、其の父を刖られて病ふる能はざる者と如何と。乃ち謀つて懿公を弑し、諸を竹中に納れ、帰り、爵を舎きて行る。

また宣公十四年、楚の荘王が斉へ送った使者の宋で殺されたと言う報告を受けると、

楚子之を聞くや、袂を投じて起つ。履は窒皇にて及び、劒は寢門の外にて及び、車は蒲胥の市にて及べり。秋九月、楚子宋を囲む。

いずれも事実の記録としては、甚だしく詳細な描写である。史記の局部的に緻密な文章は、このような伝統のもとに成立したと考えてよかろう。だがそれにしても、これらの左伝の書き方と史記の筆法との間に、なお幾らかの隔りがあるように見えるのは、何故であろうか。

上に引いた左伝の描写は、事実の記録としてはたしかに詳細であるが、それは事実の記録に止まっている。史記の筆はそれを越えて、事件の中にある人間の描写へ迫っているように感ぜられるのである。楚の荘王が袂を投じて起ったあたり、左伝の筆は緊迫した用語の中に、この瞬間における王の姿を浮び上らせている。だが一方では周に鼎の軽重を問い、また肉袒して降服した鄭伯を許して軍を引いた荘王の事蹟の底を流れる「人間」の姿を、この一条の描写を通して鮮明に把握しようとするときは、なお多少のもどかしさを覚えざるを得ない。さら

に邴歜と閹職の謀叛については、史記齊世家は次のように叙述する。

……二人浴して戯る。職曰く、足を断たれしもの の子よと。戎（史記は邴歜を丙戎に作る）は曰く、妻を奪はれし者よと。二人俱に此の言を病へ、乃ち怨み、謀りて公と竹中に游び、二人懿公を車上に弑し、竹中に棄てて亡げ去る。

二人が水浴中に交わした言葉は、恐らくは左伝に記された方が事実に近いであろう。しかし会話としては、それは何か説明的に過ぎる。史記がことさらに「戯」の一字を置き、続けて圧縮した会話を二つ続けたのは、この言葉を投げ交わして顔を見合わせた二人の間に、電光石火のように弑逆の陰謀が通い合ったと印象せしめるほどの効果を持つ。史記の筆によって、たぶん事実からは遠ざかったが、二人の弑逆者は生きて来たと言えよう。

左伝と史記のこのような相違は、外形的には編年体と紀伝体と言う形式の差が原因となっているに違いない。逆に言えば史記が本紀・世家・列伝と言う方法を選んだときに、歴史的人間を描こうとする方針は決定されていたのである。だから趙翼の言うように「遷は叙事を喜んだには違いないが、彼が真に「喜」んだのは、事件を記すことよりも事件の中における人間を描くことであった。彼が記そうとしたのは抽象的な歴史の推移でもなければ、単なる史料の集積でもなかった。歴史の形成に参加した一人一人の「人間」を描くこと、そしてその中に彼らの智慧や、愚行や、理想や、陰謀をおし包んで進みゆく歴史の足音を聞くこと、これが司馬遷の自ら課した問題だったのである。

しかし「人間」を、特に歴史的な「人間」を描くことは、決してその人物の言動の一つ一つを記録することではない。彼の生涯のうちでその生命の最も輝いた瞬間、その人格のすべてをそこに把握し得る瞬間を捉えれば足りる。それはまた、彼が歴史上の大事件に遭遇し、全力をあげてそれに対処している時とばかりは限らない。そのような場所から一歩隔たった所に立ったとき、人はふと本音を漏らすことがあるものである。

司馬遷はそのような瞬間を捉えると、あとは煩瑣も饒舌も意に介することなく、ひたすらその部分の描写に没頭する。そして描き出されたものは、張耳の子孫が趙王の位を失った事件よりもむしろ貫高と言う男の姿であり、匈奴覆滅の大計劃に関する論争よりもむしろそこに登場する将軍韓安国と言う人物の映像であった。それらの叙述の中には、さきに挙げた斉の二人の弑逆者の会話のように、事実を司馬遷ごのみに修飾したものも多いであろう。だがそのことにより、これらの過去の人物はかえって一層の具象性を持ちながら漢の武帝の時代に、そしてその一部はさらに現代までも生きることとなったのである。

むろん史記本紀・世家・列伝のすべてがこのような方法をとり、しかも成功しているわけではない。遠い五帝の時代を記すときなど、司馬遷の筆はむしろ淡々としている。明の帰有光が「太史公若熱鬧処就露出精神来了」（帰方評本史記）と評したのは、史記の描写に起伏のあることを、正しく認めたものであった。しかし、こうして歴史の中における、または歴史を形成してゆく「人間」の像を描き出すことによって、史記は史実の記録であると同時に、歴史「文学」の領域にまで足をふみ込んだのである。「歴史小説の課題は歴史的大事件の再述ではなく、これらの諸事件に参加したひとびとのすがたの芸術的手段による再現である」と言うルカーチの言葉（歴史小説論、山村房次訳、青木文庫版五一頁）は十九世紀以後の歴史小説を対象とした上での議論だから、ここに引用するのはいささか場違いめくが、史記の叙述の中には、そのような小説への欲求を充たし得るものが認められると言ってもよいであろう。

これに対して漢書は、さきに引いた諸例のように、個人の言動の歴史の中に占める比重を冷静に計量して記した。従ってそれは歴史記述

として史記よりも整頓されたものであり、またそれだけ史記よりも小説から遠ざかったと言えよう。しかしその漢書の中にも、やはり史記と同様の志向を認め得る部分が、全くないわけではない。たとえば李陵伝の終りに近く、匈奴に赴いた漢の使者が、今は匈奴の一員となっている李陵に面会し、佩刀の環を撫でて帰国を諷するあたりには、まさしく史記に繋がる血の濃さを見ることができよう。

司馬遷や班固の時代には、小説と言うジャンルが中国文学の中に地位を持っていたとは思えない。漢書芸文志に著録された小説家の書は、班固の自注によれば、多くは「浅薄」「迂誕」のものであって、その著者が果して「小説家」としての自覚や主張を持っていたかどうかは、甚だ疑わしい。言わばこの時代は、中国小説史がその形を整える直前の混沌の時期であったろう。しかしその中から、小説を書こうとする、またはそれを読もうとする原初的な欲求が、司馬遷と言う天才の力によって一たび結実し、充足されたのである。そして彼の筆法に意識的な修正を加えた漢書にあっても、同じ欲求はなお消し去りがたいものとして痕跡を残した。中国小説史にとっての先史時代におけるモニュマンの一つを、ここに認めることができよう。

ただし以上のような傾向は、漢書の後に続く正史の中では、次第に影が薄れてゆく。後代の正史も紀伝体の形をとっており、その列伝の中にはやはり興味ある挿話を挾むことが伝統として残ってはいるけれども、そこに描かれた人物の姿は、もはや史記のような生きた人間としてではなく、もっと記録的な、乾燥したものとなって来る。そして正史が乾燥してゆくのと並行して、六朝から唐へと、物語の文学が次第に形を整え始めた。しかも六朝志怪の祖と言われる搜神記の著者は、歴史家の干宝である。この一連の事実の底には、おそらく中国における小説の成立過程を語る事情がひそんでいるのではあるまいか。しかしその点まで考えるのは、この小論の及び得るところではないから、今はただ一つの事実として指摘しておくにとどめる。

（附記）史記を文学の立場から眺めたものとしては、武田泰淳氏の「史記の世界」その他、幾つかの論文が発表されている。この小論はそれらの業績に負うところが多いが、かつて京都大学において吉川幸次郎教授が講ぜられた「漢書演習」から、ことに多くの示唆を得た。附記して謝意を表する次第である。

日本文学に読みとられた論語経本・注解の系統考察の数例

新美保秀

日本文学に影響した論語の型態については、学芸大学研究報告第六集で述べた。つぎには主として如何なる論語の経本・注解が、何故に、日本文学作品に多く読みこまれて影響しているかを、研究する必要がある。そこで、日本文学作品に引説活用された論語関係の資料を、論語の本文や注解に、比較考察してみると、その訓読や用字や解釈などの諸方面にわたって、種々なる異同を残している。今これらの